In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	テキストを語る：『はじめて学ぶドイツの歴史と文化』
Author	北村, 昌史
Citation	大阪市立大学大学教育. 19 巻 1 号, p.126-129.
Issue Date	2022-03-31
ISSN	1349-2152
Type	Article
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学教育研究センター
Description	テキスト:『はじめて学ぶドイツの歴史と文化』：編者:谷直人、谷口健治、北村昌弘、進藤修一：出版社名:ミネルヴァ書房：出版年月日:2020年 11 月 30 日：利用授業:西洋史の見方、西洋史通論：授業担当者:北村昌史：特記事項:大阪市立大学教育後援会令和 3 年度「優秀テキスト賞」受賞
DOI	10.24544/ocu.20220318-002

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

═テキストを語る　Textbook Review═

テキスト：『はじめて学ぶドイツの歴史と文化』
編　　者：南直人、谷口健治、北村昌史、進藤修一
出 版 社 名：ミネルヴァ書房
出版年月日：2020年11月30日
利 用 授 業：西洋史の見方、西洋史通論
授業担当者：北村昌史
特 記 事 項：大阪市立大学教育後援会令和3年度「優秀テキスト賞」受賞

以前から、もうすこし特色のある近現代ドイツ史の概説書を作れないかと思っていた。従来の概説書は、19世紀はドイツ統一、20世紀前半はヴァイマル文化の興隆のあとナチズムによる崩壊、後半になると東西の分裂が主要トピックで、200年間のドイツ史の流れが、この３つのトピックに集約される形で記述される。もちろん概説ということで、最大公約数的なものが求められるので、これは必然的なものであることは承知している。

このようなことを考えていたところに、永らく一緒に研究会をしていた研究仲間とドイツ史の概説書を出そうということになった。どのような本にするか相談したときに、先にあげたトピックは外すことを提案したものの、さすがに却下。いろいろ検討した結果、第Ⅰ部で政治史を中心にした概説をそれぞれ工夫して書いて、第Ⅱ部で各自が得意とするテーマの通史を持ち寄り、そこに独自性をもたせることになった。その結果出来上がった本書の構成は以下のとおりである。

第Ⅰ部　ドイツの歴史をたどる
- 第１章　民族大移動からハプスブルク家復活まで――中世（谷口健治）
- 第２章　帝国改革からナポレオン戦争まで――近世（谷口健治）
- 第３章　ウィーン体制から1848年革命へ――19世紀初頭～中頃（南直人）
- 第４章　反動の時代から第二帝政期へ――19世紀中頃～20世紀初頭（北村昌史）
- 第５章　二つの世界大戦の時代――第一次世界大戦～ナチ時代（進藤修一）
- 第６章　東西分断から統一へ――1945年以降（爲政雅代）

第Ⅱ部　テーマから探るドイツの歴史と文化
- 第７章　衣からみたドイツ史――時代の趨勢を映す鏡（福永耕人）
- 第８章　食からみたドイツ史――ジャガイモから健康食まで（南直人）
- 第９章　住からみたドイツ史――木組みの家・賃貸兵舎・モダニズム建築（北村昌史）
- 第10章　学校からみたドイツ史――社会におけるその機能（進藤修一）
- 第11章　ツーリズムからみたドイツ史――「旅行の世界王者」への道（森本慶太）
- 第12章　「海」からみたドイツ史――造船・海軍・ハンザ（前田光洋）
- 第13章　大統領たちからみたドイツの政治文化――国家元首をめぐる100年史（爲政雅代）
- 第14章　ドイツにおける貴族の歴史――特権身分の生成と消滅（谷口健治）

ドイツ史にかぎらず、西洋史分野の概説書で、第Ⅱ部のように「衣食住」が揃っているものは、寡聞にして知らない。この点だけでも、本書は十分な意義を主張できるものと自負している。第10章の「学校」は、ここ40年ほどの教育社会史研究の成果にもとづくものである。他の「ツーリズム」、「海」、「大統領」、そして「貴族」も日本のドイツ史研究者の関心は高くなかった領域だが、こうしたテーマからドイツの歴史に一つの見通しを獲得できることを十分に示している。ドイツの歴史が有している多様性が本書から十分読みとっていただけるであろう。逐一紹介する紙幅はないので、筆者の担当した第４章と第９章、およびほかの執筆者による章のうち、日本のドイツ史研究においてほぼ見落とされてきたテーマをあつかう第12章と第13章を中心に紹介したい。

概説の第１部は、ドイツにおける王朝の変遷を中世から近世まで丁寧にたどった第１章と第２章、ナポレオンの衝撃により改革のはじまったドイツ社会の変動を1848年革命までを描いた第３章をうけて、筆

者による第4章は、1848年革命から第1次世界大戦までの時期をあつかっている。この章の叙述は、何度か担当した文学部専門科目「西洋史通論」の授業ノートをふまえている。従来の概説書と同様、革命からドイツ統一を経て帝国主義に至る流れでこの時代を叙述しているが、次のような特色を盛り込むようにした。第1に、政治史だけではなく、社会史的情報も取り入れる。とくに、1848年革命の影響でベルリンやウィーンといった大都市の都市改造がおこなわれたことをとりあげたが、これは自分の担当した第9章「住から見たドイツ史」とのかかわりを意識したものである。第2に、1871年に誕生したドイツ帝国が、「帝国」といいつつ、実際にはもともとあったドイツの諸国（邦）が寄り集まった「連邦」にすぎないことを強調した。その点でドイツ統一の意義の相対化をはかったつもりである。第3に、現在のドイツ連邦共和国よりもドイツ帝国の領土は東方にはるかに広がり、そのためポーランド人を中心にドイツ人ではない人たちがドイツ帝国にいたことを意識した。

第5章は、二つの世界大戦を「第二の三十年戦争」と位置付ける。これは、ナチズムを前後と異なる特殊な時代とみなす見方を相対化するものといえる。第6章は東方の領土を失ったドイツが東西に分断し、それが再統一し、現在に至る過程を丹念に追う。

個別のテーマをあつかう第Ⅱ部は、まず衣食住をとりあげる。中世から現代までの服飾の変化をたどる第7章、ドイツの食にとって特徴的なジャガイモとコーヒー、19世紀における工業化と都市化による食の変化といったテーマから論じる第8章があり、19世紀以降の住を中心にあつかう第9章は筆者が担当した。この章の叙述は、毎年担当している全学共通科目「西洋史の見方」や非常勤で出講している関西大学社会安全学部「近代史」の授業ノートを利用している。19世紀初頭の段階では、住宅という箱があるだけで、水や燃料の供給、排せつ物やごみの処理は人手によって担われていた。都市化に伴い上下水道、ガス、電気などが整備され、住宅を成り立たせるためにこうした管や線が必須のものとなる。これにあわせ鉄道、路面電車、バスなどの公共交通機関の建設が進み、20世紀になると都市郊外への住宅建設が進むようになる。20世紀前半にドイツを中心にヨーロッパで生み出された新しい住宅の方向性の背景には、19世紀における住宅の在り方の大きな変化があるのである。

第10章は学校教育の変遷を、とくに19世紀以降について社会史的視点を交えつつ論じ、第11章は「旅行の世界王者」と現在評されるドイツ人のツーリズムの在り方を中世からたどる。

「海」をあつかう第12章を担当したのは文学研究科都市文化研究センター研究員の前田充洋である。現在のドイツ連邦共和国の海岸線はそれほど長い感じではないが、第2次世界大戦までドイツの国土は、現在よりも東のほうに広がっていた。とはいえ、全世界にまたがる海洋帝国を作ったイギリスの海事への関心の高さとは異なり、日本の近現代ドイツ史研究における「海」への関心は、それほど高かったとはいえない。実際、「海」にかかわるテーマとしては、中世以来北ヨーロッパの交易を担ったハンザ同盟や、第1次世界大戦末期に発生し、戦争の終結や帝政の崩壊をもたらした水兵反乱に関心が払われてきた程度である。それに対して、第12章では、海軍やそれを支える造船技術と鉄鋼業、海運・水運、海事の伝統の創造など多面的に議論を展開し、近現代ドイツ史を語るうえで「海」が不可欠の要素であることを鮮明に示している。

第13章は、大統領をあつかう。ヴァイマル共和国において大統領に大きな権力をあたえたためナチズムの台頭を容易にした状況への反省から、第2次世界大戦後の大統領の権力は限定的なものにとどまる。連邦大統領は、政治的には中立であることが求められた。連邦大統領といえば、1980年代にナチズムの過去の克服を求めたヴァイツゼェッカーに関心が集中していたが、大統領の機能や活動についてはきちんと紹介されてこなかった。第13章は、そうした連邦共和国の大統領に就任した12名の経歴や活動を紹介し、彼らが、ドイツ社会を「代表」し、「対話」し、「批判」し、そして「統合」する姿を描き出している。

本書を締めくくるのは、貴族をあつかう第14章である。伝統的に、近代ドイツ史研究では社会に前近代的色彩をあたえた存在として、エルベ川以東の土地所有貴族である「ユンカー」に関心が払われてきた。とはいえ、富と権力を集中させてきたドイツの貴族の全

体像を概観した叙述はなく、中世から現代までのこの社会層の変遷を追う本章は、その欠をおぎなう。

以上のような本書の出版はコロナ過に社会が揺れた2020年11月であったが、企画そのものは流行前から動いていた。もともとは授業のテキストとしてはそのうち使ってみようというくらいの気持ちしかなかったのだが、遠隔授業という状況のもと間違いない情報を教員と学生の間で共有する手段として本書を教科書として活用することにした。そこで、2021年度前期の全学共通科目「西洋史の見方」でテキストとして利用した。この授業のシラバスの「科目の主題」は以下のようなものである。

1980年代以降研究手法として定着した社会史研究の成果からみた、西洋史の見方を提示する。具体的には、16世紀から19世紀にいたるヨーロッパ史の動向を、高校の世界史のような政治史や経済史からではなく、人々の日常生活のレベルから描きたい。

教科書として利用するにあたって個人的に問題であったのは、文学部出身の教員にありがちなことであるが、教科書を使って授業したことがないことである。そもそも学生時代に教科書が指定された授業といっても、語学の授業以外ほとんどうけた経験がない。しかも、遠隔授業という学生の反応が見えない形でおこなうのである。教科書を使った授業がうまくいかなかったときのことを考え、授業の前半は、それまでの授業をふまえて前年度（2020年度）に作成したオンデマンド授業の教材を使用し、授業全体の枠組みをそちらで構成することにした。すなわち、社会史的観点からすれば、ヨーロッパ史は18世紀後半から19世紀前半にかけての時期が大きな転換点であり、その背景には多死多産から人口増加へという人口動態の変化があることをまず提示する。本書第Ⅱ部の各章は、必ずしもこうした観点から説明を試みているわけではないが、授業の後半では１回に１章をとりあげ、それぞれの章を授業の枠組みに沿って理解してもらうようにした。

教科書を使う部分の毎回の授業では、授業の大枠をふまえた各テーマについての簡単な説明のパワーポイント資料をまず受講してもらい、そのあとに教科書の当該の章を読んでもらう。それをふまえて、その題材についてヨーロッパ社会がどのように変化したのかを考える課題に取り組んでもらう。たとえば、食をあつかう第８章をとりあげた授業では、以下のような課題を出している。

ジャガイモかコーヒーのどちらかについて、18世紀の定着の状況と19世紀に果たした役割について400字くらいで整理してください。

ジャガイモもコーヒーも、外来のもので18世紀に定着し、その後独自の発展を遂げ、現在のドイツの食生活に欠かせない食材となっている。これらの食材の転換期前後の機能の変化を理解していただくのが、この課題の目的である。

こうした課題は、次の授業の前々日まで解答してもらい、前日に解答を整理して、課題へのコメントについてのパワーポイント資料を作成することにした。当初は、インターネットからコピペしてきた解答や筆者が作成した授業用ファイルだけをまとめた解答など、筆者の意図に対応していないものも散見されたが、すくなくともコンスタントに課題を提出した受講生に関しては、おおむね授業ファイルと教科書をふまえて課題にとり組むようになった。

もちろん、求めているものとずれている解答も存在した。もっとも多かったのが、時代がずれたもので、たとえば、先にあげた食の課題についても、18世紀と19世紀の変化を書いてほしいところであったが、20世紀のはじめにおこった第１次世界大戦中の食料危機の「カブラの冬」を説明する学生がいた。時代が異なる点については、歴史学が時間軸に沿って事態が変化するのを追う学問であることを強調し、課題やレポート作成の際にはその点をはっきり認識してほしいとコメントする。ほかにも問題がある解答があればコメントするが、解答はおおむねしっかり書かれており、その点もコメントではっきりのべるようにした。最終レポートも、おおむね、授業のファイルのみならず、教科書の叙述をしっかり取り込んで書かれており、オンデマンド形式の授業で学生に必要な情報を身に着けてもらうためにこのテキストが十分に役に立つものであっ

たことを実感した。

未経験であった教科書を使う授業もオンデマンド形式では十分筆者も対応できることが分かり、今この原稿を執筆している2021年度後期の専門科目「西洋史通論」でも、方法に改良を加えながらこのテキストを使ったオンデマンド形式の授業をおこなっている。あと、筆者にとっての課題は、対面に移行した場合に教科書を使った授業をどのようにおこなうかであるが、これについてはそうした機会が生じたときに改めて考えたい。